

再出発を期し定期総会開く ～全国シンポの成功、平和資料室の設立をめざす～

設立4年目を迎えた「鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会」の定期総会が4月14日午後、白子公民館で開かれました。約40人の会員が出席。保存をめざしてきた旧海軍の格納庫は取り壊されたものの、①軍都として誕生した鈴鹿の歴史を後世に伝える平和資料室の設立、②この夏、鈴鹿で開く戦争遺跡保存全国シンポジウムの成功、③記念モニュメントの建立、などをめざし再出発することを誓い合いました。

冒頭のあいさつで加藤二三子共同代表は「残念ながら格納庫は壊されましたが、無知ほど恐ろしいものはないと痛感しました。映画『埋もれ木』の撮影で格納庫の中を走り回りながら、貴重な戦争遺跡だという認識がそのときの私にはなかった。あのとき知っていたらと悔やまれます」と振り返りつつ、全国シンポジウムの成功に向け、会員の協力、支援を呼びかけました。2011年の活動報告をした竹内宏行共同代表は「つらい1年でした」と切り出し、格納庫再構築断念の経緯、NTTから提供を受けた部材の保管などについて、鈴鹿市との交渉を中心に話しました。出席者から、市長と市職員との関係、部材の保管期限、モニュメントの制作主体、市制70周年記念事業への参加などについて質問が出されました。とくに市とのかわりでは「せっかくできた共通の土俵を大事に、粘り強く話し合っていく」姿勢を強調しました。

2012年の活動方針を提案した岩脇彰世話人は、平和資料室について「名古屋や岐阜にはあるが、三重にはない。戦争の記憶を伝える施設だ。時間がかかるかもしれないが、実現をめざしたい」と述べ、全国シンポジウムの開催について「格納庫の保存ができなかった教訓を伝え、また、全国の事例から学ぶ場にしたい」と話しました。

中川正春内閣府特命大臣から総会に寄せられた「市民の会の皆様の活動は『戦争遺跡の保存と鈴鹿市の将来の在り方』について、市民の立場から主体的に取り組まれたことから、一定の成果を得られたことに心から敬意を表します」というメッセージが披露されました。司会の中森成行世話人は、戦争遺跡を将来の在り方にかかわる問題としてとらえた中川大臣のメッセージを評価。また、意義ある総会になったことを謝し、「全国シンポジウムでは、参加券の販売、当日スタッフなど会員のみなさんの協力をぜひお願いしたい」と締めて総会を終えました。



平和資料室めざし「ピースあいち」から学ぶ ～運営委員、金子力さんの話を聞く～

平和資料室（将来は平和資料館）をめざす私たち「市民の会」は、設立に向けたこれからの取り組みの教材になればと、定期総会に「戦争と平和の資料館ピースあいち」の運営委員、金子力さんをお招きして話をお聞きました。講演要旨は以下の通りです。

《鈴鹿は軍都の先輩》

私は春日井市に住んでいますが、実は鈴鹿市は軍都の先輩です。鈴鹿を手本に町村合併して陸軍の施設を造りました。鈴鹿の半年後の1943年6月、市となりました。海軍工廠を造った豊川市も同じときにやはり軍都として誕生し、市制施行されました。

《滋賀県平和祈念館》

この3月に滋賀県東近江市にできた県立の「滋賀県平和祈念館」を見学してきました。合併して空いた元愛東町の役場を2億円かけて改装してつくったものです。広いスペースは狭い私たちのところと比べものになりません。有給の職員が9人いるそうです。うちは年間100万円足らずの専従が一人だけ。しかし、造る前にピースあいちを見に来てくれたそうで、「ボランティアの生き生きした活動はすごいですね。元気をもらった」と聞いてうれしくなりました。

《早い段階で構想》

ピースあいちは、この5月で開館5周年となりますが、建設の動きは1993年ころから始まっています。今年できた滋賀県もそのころからで、いまの知事のもとで実現しました。「戦争メモリアルセンターの建設を呼びかける会」を立ち上げたあと、94年3月愛知県議会、翌年3月名古屋市議会で、ともに戦争資料館建設の請願が全会一致で採択されました。同年、愛知県と名古屋市が「戦争に関する資料館検討委員会」を設置し、行政の手で動き始めました。1998年には県と市が市民から戦争資料の収集に着手しました。しかし、愛知万博や中部国際空港の建設が持ち上がり、県は財政難を理由に「箱もの建設凍結」の方針を打ち出して行政が手を引く形となりました。

《市民の手による建設》

2003年、NPO法人「平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会」が発足。05年5月、市民から収集し、活用されずに埋もれていた資料を愛知県に出させ、「平和のための戦争資料館展」を名古屋市民ギャラリー一矢田で開催しました。2458人の入館者がありましたが、その中に、スーパーの駐車場に貸していた90坪の土地と1億円を寄付してくれる人がいたのです。県市にこの寄付を受けて資料館を建設するよう要請しましたが、断られ、NPOが受けることになりました。この方はすごいお金持ちではありません。コツコツ貯めたお金で、いまも質素な暮らしをしておられます。この寄付金を基に、寄付を呼びかけたところ、3000万円が集まり、鉄筋コンクリート3階建て延べ500㎡の建物（1階多目的ホール、2階常設展示室、3階企画展示室）を建設。07年5月開館することができました。



《約90人のボランティアで運営》

ボランティアは高校生から90歳代まで集まり、平均70歳くらいです。義務感とか運動とかではとても続かない。面白く楽しくやろう、とやっています。常設展や企画展のパネルも手づくりで、運営委員やボランティアの希望者で構成する調査研究会が資料収集し、原稿を書いて、レイアウトから仕上げ、飾りつけまで受け持ちます。看板屋さん、印刷屋さんなど幅広い人材に恵まれています。

《厳しい資料館の経営》

運営にはお金がかかります。半端な金額ではない。1年間の維持経費だけでも1000万円以上です。約800人の会員の年会費と入館料（大人300円、小中高生100円）では不足、不足分は個人、団体の寄付に頼っています。寄付については税金の控除対象となる「認定」NPO法人になっています。各種財団の助成金を申請、県・市の平和学習支援授業の受託など、収入確保に努めています。入館者総数は昨年、3万人を越えました。リピーターを増やすため、月1回の無料映画会などユニークな取り組みをしています。

《博物館相当施設に》

2010年8月、愛知県教育委員会から「博物館相当施設」として指定されました。東山動植物園と同等の施設となったわけです。レジュメの最後に「日本における平和のための博物館」一覧（60館）をつけました。年代順に並べてみると、公立の平和博物館が多く設置された時期、民立が多く開館した時期があります。ピースあいち開館以降も各地で平和資料館の開館は続き、滋賀県の例を見ても「公」の道が断たれたわけではないと思います。



